



## 文藝時評

文學士 大町 桂 月

### 最近の國語問題

近頃、文部省は、文法と國語の假名遣とを改定して、國語調査會に諮問し、高等教育會議に、議案として提出せり。此際、余輩の如き操觚に従事する者は、ひと通り、之に對して意見をのべ置くの必要ありと信ず。

國語、國字、文法假名遣などは、その由來する所久しく、その影響する所大にして、實に國民精神のやどる所也。ちよん鬚は、切つて、散髪とすべし、和服は、改めて、洋服とすべし、下駄は、靴とすべし、日本料理は西洋料理とすべし。これらは、國民精神に關係する所、少なければ也。されど、國語は、此等のものとは、大に趣を異にす。少し不便あればとて、直に之を廢すること、敏履を棄つるやうにては、國語動搖すると共に、國民精神も動搖し、終に國家も動搖するに至るべし。

さは云へ、世うつると共に、風俗もうつれば、道德もうつり、國語も亦うつる。うつるは、進歩也。うつらざるは、退歩也。明治の國民の用ゐる國語と平安朝時代の國語とは、

大に異なれり。頑冥なる國語家、天曆以前を標準として、一概に、今日の文章を律せむとするものあれど、余輩は大に不賛成也。文法と云ひ、假名遣と云ひ、つまり、一般の國民に通じ得るやうにする假りの約束也。千歳不變の定律には非ず。一般の承諾次第にて、どうにても改めて可なるもの也。日本語を發して、英語を用ゐるとか、假名を廢して羅馬字を用ゐるといふが、如きは、餘り急激なる改革也。土臺よりうちこはすものにて、變遷とは、云ひがたし。されど、文法の上、今の人に通じやすきものにうつし、假名遣を一寸變ずるぐらゐの事は、變遷しても可なる變遷也。國語を動搖さするほどの大事件には非ず。

文部省は、さきに、字音の假名遣ひを變じたり。之によりて、小學の教員が、いかばかり喜び、小學生徒がいかばかり徒勞することを免れたるかは、教育家以外の人は、恐らくは、想像も及ばざべし。世間には、之に反對するもの多かりしかど、ともかくも、國民教育上の一進歩也。されど、字音の假名遣のみ改めて、國語のを改めざるは、文部省の方より云へば、姑息也、龍を畫いて、未だ睛を點せざる也。小學教育の上より云へば、不便也。兒童もとより音と訓とを判せず。音改まるも、訓改まらざれば、却つて混雜を來たす。この度、改定が國語の假名遣ひにも及びたるは、國民教育者の要求也。文部省の獨斷に非ず。自然の順序、必ず斯くならざるべからざる也。文部省がさきに字音のみを改めて、國語を改めざりしは、姑息にして、勇なきに似たれど、實は狡獪也、字音、國語、一時に改むれば、世の反抗多けれども、字音だけなら、

まあよしと、世に油断させ、愈、必要にせまつた風をして、一舉して、國語に及べば、世の驚愕、さまで大ならず、随つて反抗も少なし。今となつては、仕方なし。字音が改まつたから、ついでに國語に及ぶ方が便利なりと、あきらむるもの多かるべし。

まづ文部省が改定せる文法上の事項は、如何にぞといふに、十六箇條より成る。その一、「居り」「根む」「死ぬ」を四段言にして可也。その二、「悪し」を「悪しく」として可也。その三、「鎮火せざりき」を「鎮火せざりし」として可也。その四、「異なり」を「異なれり」として可也。その五、「手習させず」を「手習さず」として可也。その六、「非せらる」を「罪ざる」として可也。その七、「得しむ」を「得せしむ」として可也。その八、「暮し」を「暮せし」として可也。その九、「就學する義務」を「就學するの義務」として可也。その十、「有りや」を「有るや」として可也。その十一、「經とも」を「經るとも」として可也。その十二、「月出づと見え」を「月出づると見えて」として可也。その十三、「月と花と」を「月と花」として可也。その十四、「如何なる故にか」を「如何な故にや」として可也。その十五、「如何なる事由ありとも」を「如何なる事由あるも」として可也。その十六、「顔回といふもの」を「顔回なるもの」として可也。いづれもみなても可なりにて、在來の正しき用法を廢するわけにはあらず。而して、これ等は、文部省の獨斷には非ず。今の大多數の操觚者の現に用ゐる所也。余もこの改定の二三を除きては、天曆以前の正しき用法にあらずと知りつゝも、

目に慣れ、耳に慣れたるを便として、之を用ゐるもの也。余輩は、これを變遷と目す。必ずしも誤謬と目せず。元來、余輩は、文法の必要を認むれども、また變遷を認む。余輩の文法に對する考は、極めて自由也。唯わかり易く、見やすく、一般に通じ易きを標準とす。文部省が改定せる文法上の事項の外にも、なほ改定しても可なるもの少なからず。文部省の改定せざる所なれど、余輩は、宛字に就いても、自由なる考を有す。せん方とするも、詮方と宛字を用ゐる方が、見やすく、わかり易きことあり。困難に「むづかしく」と、傍訓ふるよりも、慣用に從つて、「六ヶ敷」と用ゐても可也。一概に宛字を廢斥するは、頑冥なるしわざ也。又送り假名も、文法家の中には、やかましく云ふ人あれど、余輩は、一定するの必要なしと信ず。元來、漢字は、ほんの假りもの也。「我れ」としてもよく、「我」としてもよし。「申し候ふ事」としてもよく、「申候事」としてもよし。又句讀點も、一定するの必要なし。元來、日本文は、句讀點が無くて、讀めるものにて、目に入り易きために、之を用ゐるに、過ぎざれば、余は、自分のうち方を一定せず。各人を一致せしむるは、猶更 unnecessaryなる事なりと信ず。要するに、今回の文法上の改定は、余輩の現に用ゐる所にて、今更改定の是非を云ふまでもなき事也。

國語の假名遣の方は、數十條もあれば、一々こゝに列擧するの違あらず。その要點は、地方の訛音には從はずして、發音通りに、假名をあてはむ。例へば、庭を「には」とせずして、「にわ」とし、「櫻は美なり」を「櫻わ美なり」とし、習

ひを習いとし、顔を「かほ」とせずして、「かを」とするが如し。一也。引音に縦線(一)を用ゐる。之を動詞には用ゐず。例へば、用意を「よゝい」とし、養ふは「やしのー」とせずして、「やしのうち」とするか如し。二也。をを廢して、をを存し、をを廢して、いを存し。をを廢して、えを存す。三也。ぢをじに改め、づをずに変更、四也。先づこれ位の事也。

第一の發音のまゝに書くとは、今の教育ある人士の目には、不快を感じずれど、慣れて見れば、さまたの事に非ず。動詞の語原がわかり難くなれど、國語を根柢よりうちこはすものに非ず。用法の上より云へば、極便利也。

第二の縦線を用ゐるとは、氣にくはぬ人もあるべく、縦線のかはりうちに用ゐたりしと思ふ人もあるべけれど、一層改むるならば、思ひ切つて、縦線を用ゐるがよし。それが、片假名ならよけれど、平假名になると、しと混同し、且つ字形の美を損す。平假名に限りて、しはしに改めて縦線の代りに改用するやうにすれば可なるべし。又動詞の尾のうも、養を *jasianu* と發音する場合には、やしなうとし、*jasianu* と發音する場合には、やしのーとするが、文部省の改定以外、一層進みたるもの也。

第三のち、ぬ、をを廢するとは、當然の事也。奈良朝に成りたりといふ五十音圖には、その數五十あり。平安朝になりたりといふいろはは、その數四十七也。はじめに、五十音を一々言ひわけたりしかも知らねど、わ行のう、や行のい、や行のえは、既に發音する能はざるやうになりたる也。今や、わ行のゐ、わ行のゑ、わ行のゑ、わ行のをも發音する能はざるもの多く

なりたれば、つまり、今は、いろは四十四字にて事足る也。

第四のぢ、づを廢するは、既に字音假名遣を改めたる際に、之を行ひたるが、その際には、ぢの代りにじ、づの代りにずを用ゐてもよしぐらゐの事なりしが、今度は思ひ切つて、全く改めたり。これ少し矛盾也。余の意見は、改むるとせずして、やはり用ゐてもよしと、許すだけにして置きたきもの也。東京を中央とする諸地方にありてこそ、ぢとじ、づとずとを區別して發音するを得ざるもの多けれども、關西の諸地方にては、正しく之を發音す。余の生國土佐の如きも、これ也。かゝる處にて、ぢとづを廢せられては、却つて不便也。

今、兩者の便利をはかりて、發音しうるものは、づ、ぢにしててもよく、發音し得ざるものは、ず、じにしてもよしとして置くを便とす。もとくぢづも少し注意しなれば、發音し得ざるにもあらず。即ち、た行は、舌を上あごに當て、さ行は齒にあて、發音するといふ事がわかれば十分也。獨逸語を學ぶにしても、冠詞の *die* は *チー* と發高し、代名詞の *she* は *ジー* と發音せざるべからざる事也。又、餘計に新字を設けるてもなく、た行のちとつとに、濁點をうてば、よき事なれば、今俄に之を廢せずとも、兩者のまゝに存し置きて、勝手に用ゐさせて可也。

發音通りに、國語の假名遣ひを書くとは、小兒の讀本には、極めて、便利也。また、文部省が新に思ひたちたるに非ず、岩谷小波の如きは、お伽噺を書く場合に限りて、發音通りにかきたり。文部省がその眞似して、之を小學中學の讀本に應用するに至りたるは、つまり、小波の意見が、自分以外

にも通りたる也。余輩は、この度の文部省の改定に對して、異議を挾まず。之を小學中學に用ゐることを是認す。さらば汝も、文部省の新假名遣に従ふかと云ふに、こは、別問題也。たとへば、文部省の改定は、愛宕山の男坂の外に、老幼の便をはかりて、女坂を設けたるが如きもの也。足の弱きものは、その女坂を通りてもよけれど、足の強きものは、依然、男坂を通るだけの事也。女坂をつくりたる爲め、よしや、少し風致を損するとも、老幼の便利にはかへられず。又譬へば、園遊會に、袴、羽織の禮服をつけて來ずとも、平服にても可なりと許すが如し。貧乏人は、爲めに便を得て、平服にて、のこ／＼出掛くべけれど、禮服を有する者は、從來の如く盛裝して行きて可也。人は虛榮心あると共に、向上心あるもの也。之を衣服に見るに、木綿物にて出會しても可なりと許されても、見えばうをしたがるの人情、借金しても、盛裝してゆくもの多からむ。文法上、假名遣の上にも、之と同じく知らぬものも、知つた風して、むづかしい方の假名遣をやりたがるべし。余輩は、新假名遣が出てたるために、少しは、混雜するところあるべきを豫想す。されど、一種の保守家、神經家、もしくは頑冥の徒が、大騒ぎする程な大問題に非ず。舊道の外に、新道が出来たものと見れば可也。余輩は、慣用の久しき、從來の用法を、却つて便とすれど、その新道を通ることがあるか知らず。世の操觚者も、はゝあ、便利な新道が出来たナと見て居れば可也。之に従ひてもよく、従はずしても、亦可し。ともかくも、過渡の世の中也。少し氣を大きく持ちて、混雜して大害なきまでは、混雜せしめよ。その中には、自然に、

優者が勝を制すべき也。

## 韻文の翻譯

散文に、韻文に、外國の文學を翻譯せるものは多けれど、唯、内容を傳ふるだけにて、形式の美を得たるものは、幾んど之を見ず。われ少時逍遙が沙翁の戯曲を譯せるシーザー奇譚を讀みて、明治の世にも、かゝる流麗なる七五調の文字あるかと感歎したりしが、その頃は馬琴を崇拜せしかば、それより割り出して、斯くは感ぜしなるべけれど、今讀まば、それほどには感ぜぬかも知るべからず。尾上柴舟の譯せるハインネの詩は、形式の上は、先づ合格點以上也。されど、果して原詩に忠實なりや否やを知らず。秋元蘆風の粉紅集は、獨逸の詩數十篇を翻譯せるものなるが、これは、一々、原詩を添へたるほどの自信があるだけ、原詩に忠實也。形式も上出来也。われその勞を多とす。ウーランドの海邊の城の如きも、よくも、このやうに、そつくり其儘、日本の文字に移したかと感服する節多し。この詩は、柴舟も銀鈴の中に譯し置きたり。柴舟は、ちと迷惑なるべけれど、二者を對照すれば、蘆風の苦心は、一層明かになるべし。もとの詩は、名吟と感歎すべき程のものにあらねど、榮耀榮華を極むる王公貴人にもなほ愛女を喪うて悲歎にくるゝを免れざる浮世の無常を、すらりと問答體に叙し去りたるが、二人の氣に入りたるものや。全體がわづかに八節より成る。柴舟は之を七五調に譯し、蘆風は之を五七調に譯せり。七五調は軽く、五七調は重し。このやうな悲哀な事を描くは、重きがよけれど、七五調にては、

不可なりと云ふべきにもあらず。原詩の第一節に曰く、

Hast du das Schloss gesehen,

Das Schloss am Meer?

Golden und rosig wehn

Die Wolken drüber her.

蘆風之を譯して、『その城を君は見たりや、海岸に聳ゆる城を、紅に黄金の色に、その上を雲は漂ひ』と云ひ、柴舟之を譯して、『海岸近く聳えたる、いかめしき城見しや君、黄金の色に紅に、雲こそうかべその上に』と云へり。兩者先づ無難也。然し、いづれかと云へば、いかめしきが餘計にて、浮べも氣がきかねど、柴舟の方がよし。蘆風のその城は拘泥し過ぎたり、雲は漂ひは、雲たなびけると改むるを可とす。第二節に曰く、

Es möchte sich niederneigen

In die spiegelklare Flut,

Es möchte streben und steigen

In der bhendwolken glut.

柴舟の譯に曰く、『鏡と澄める水の面に、影こそうつせさやかにも、紅燃ゆる夕雲に、飛びこそ翺れをしくも』と。蘆風のに曰く、『鏡なす水のちもてに、その城の影は映りつ、夕雲の燃ゆるが中に、その城の影は登りつ』と。蘆風の影は登りつは無理也。柴舟の飛びこそ翺れば、更に一層無理也。この第三句は、日本語にうつさば、奮躍して登るが如しとても云ふべき處にて、雲表に聳立すと云ふの意を、擬人的に活かして形容したる也。第一節にも、第二節にも、雲をかつき出した

るは、まづけれど、第三句の Steigen(登るに)對して、第一句に、niederneigen(俯く)の語を用ゐて、登ると俯くと對照したる處に、作者の用意を見るべし。然るに、二人とも、この用意を閉却して、俯くの方は、柴舟は、影こそうつせと云ひ、蘆風は、影はうつりつと云ひて、極平凡に意譯しながら、登るの方は、原句に拘泥して、却つて、ぼろを出せり。蘆風の譯を改めて、『その城は俯くが如し』『その城は立ちのぼる如し』とてもすべし。その城が耳ざはりとならば、『うつむきて姿うつしつ』『立ちのぼり高ちよそひつ』とてもすべし乎。第三節に曰く、

“Wohl hab' ich es gesehen,

Das hohe Schloss am Meer

Und den Mond darüber stehen

Und Nevel weit umher.”

蘆風が之を『げにそれを我れは見たりき、海岸に聳ゆる城をその上に月は懸りつ、そのほとり霧は掩ひつ』と譯せるは、よし。三四の句を、『その上にかゝれる月を、そのほとり掩へる霧を』とすれば、原句には忠實なれど、それほどまでには及ばざるべし。柴舟が、之を『われは見たりきその城を、海岸ちかきその城を、月はかゝれりうるはしく、霧はめぐれりいかめしく』と譯したるには、非難なきを得ず。二節もつゞきて『さやかにも』『をしくも』『うるはしく』『いかめしく』と、餘計な語をのべつにならべたるが耳ざはり也。殊に、霧がいかめしく繞るは、生硬も亦甚し。第四節に曰く、

Der Wind und Meeres Wallen,

Galen sie frischen Klang?

Vernahmst du aus hohen Hallen

Saiten und Festgesang?

柴舟の譯、『わたの波風あもしろく、たのしき聲にひびきしか、君は聞きつや高殿の、上にしらぶる樂の聲』は、よし。わたの波風が、今ひと息也。蘆風の譯、『空の風、はた海の波、たのしげの音にひびきしか、絃の音、はた歌の聲、高殿内君は聞きしか』高殿内が拘泥し過ぎて、無理也。高殿に湧くを聞きしか』と改めたし。第五節に曰く、

“Die Winde, die Wogen alle

Lagen in tiefer Ruh’;

Einem Klageled aus der Halle

Hort ich mit Thränen zu.”

蘆風の『吹く風もはた打つ波も、その響しづまりかへり、高殿のなげきの歌を、眼に涙われは聞いたり』も、柴舟の波のさわざも風の音も、ひびき絶えたる一時に、目ぶたにあまる涙もて、われは聞きたり泣く聲を』も、みな不可なし。されど、原詩には、風も波も爲めに哀意を表すの意味をさかせたれば、柴舟の『ひびき絶えたる一時に』よりは、蘆風の『静まりかへり』の方が切也。たゞ、『はた打つ波』は、『岩うつ波』と改め、三四の句は、『高殿に泣く聲するを、うち聞きて袂ぬらしつ』と改めては、如何にや。第六節に曰く、

Salest du ohngehen

Den König und sein Gemahl.

Der roten Mäntel Wehen,

Der golden Kronen Strahl?

柴舟之を譯して、『君見つらむか塔の上に、立てる君をも后をも、深紅なみ立つ上衣をも、黄金きらめく冠をも』としたるは、大に好し。蘆風之を譯して、『紅の上衣のなびき、黄金なす王冠のひかり、その城の王と妃の、あゆむをば君は見たりや』としたるは、數等下れり。黄金なすは、黄金のやうな意なれば、こゝは、『黄金の』と改めざるべからず。眞の黄金の冠也、黄金まがひの冠にあらざれば也。二二の句のなびき、ひかりの二名詞も、原句とはなれて、なびかせ、ひからせと改むるを可とす。第七節に曰く、

Führten sie nicht mit Wonne

Eine schöne Jungfrau der?

Herrlich wie eine Sonne,

Strahlend im goldenen Haar?

柴舟之を譯して、『喜ばしげにともなひし、愛らしき少女を見ざりしか、黄金の髪の毛のきらめきに、天つ日のごとくつくしき』としたるは、大によし。蘆風が之を譯して、『この二人喜ばしげに、少女をや伴はざりし、その髪は黄金とひかり、まばゆさの日光に似たる』としたるは、誤れり。第三句の『太陽の如く立派に』とは、麗人の形容也。髪形容にはあらず。柴舟の『天つ日のごとくつくしき』は麗人の形容と聞ゆれど、蘆風の『まばゆさの日光に似たる』は、麗人の形容とは聞えず、原句には、毫も、まばゆさの意なし。蘆風の譯を改めて、『黄金なす髪もひかりて、日の如く姿尊と』と云へば、文句は、まづけれど、意は通すべし。第八節に曰く、

“Wohl sah ich die Eltern beide,

Ohne der Kronen Licht,

Im schwarzen Trauerkleide;

Die Jungfrau sah ich nicht.”

蘆風之を譯して、『悲みの黒衣まとい、冠の光うせたる、両親をばわれは見たりき、少女をばされど見ざりき』とせるは、大に好し。柴舟が『われは冠の光なき、み親二人の君を見し、身になしみの衣つけて、傍に少女はもたざりし』と譯せるは、大にまづし。少女は持たざりしは、前節のともなは、しとの重複をさけむとて、別の言葉を用ゐたるべけれど、これでも、やはり重複は免れず。子を持つ、娘を持つと、一般には云へど、傍に少女をもつといふ言方はあらず。これは、柴舟にも似合はぬ生硬なる言ひ方也、これは、原詩の如く、両親は見たが、少女は見ずといふやうな言ひ方にするを可とす。身になしみの衣つけても、少し言ひ方を改めて、第二句にくりあぐるを可とす。

この譯詩について、察するも、譯讀の方は、柴舟が、うはて也。蘆風の方は、いかゞはく思はる。柴舟は、既に短歌の作者として名あり。蘆風は、まだ名の知れざる人なれど、韻文をものする力量は、たのもしくは思はる。且つ原詩に忠實なることは、柴舟の上にある。この忠實と韻文の手腕とを以て進まば、將來、澤詩家として、一家をなすに足るべし。高橋五郎氏の如き、木村鷹太郎氏の如き、大膽に長篇大作を翻譯せるは、感心なれど、惜むらくは、韻文の手腕なし。柴舟や、蘆風や、韻文の手腕はあれど、根氣なし。柴舟のハイネ

の詩は、ハイネの作の十分の一にも足らず。蘆風の粉紅葉は、獨逸詩碎と稱するも、僅々四五十の短篇に過ぎず。われは、この二人の比較的、譯詩の手腕に於て、成功せるを認む、一々對照して、さびしく是非するは、備を君子に求むる也。特に蘆風に向つては今一層、譯讀の力を養はれむことをすむ。この詩の如き解し易きものにも、なほ誤譯あり。ついでに、今一つ、誤譯を示して、その反省を促さむ。シルレルの手袋の詩中、

“Den Dank, Dame, begehrt' ihh nicht,”

を譯して、『感謝も貴女も願はず』と云ひたるは、何たる、そゝつかしき誤譯ぞや。これは、『貴女よ、感謝を望まず』と云ふべきとは、一寸獨逸語を學びたるもの、直ちに氣のつく所也。且つ原詩をはなれて云ふも、この詩は、もと、武士の意氣地を描けるもの也。お禮も云つてもらひたくなし。お前に愛想つかしたとは、武士の意中に思ふ所なれど、それをあらはに云ひては、市井の匹夫也、武士の武士たる所以を失す。譯讀の上より云ふも、甚しき誤謬也、又詩人としての用意の上より云ふも、太だ粗笨也。要するに、粉紅集は、獨逸語の初學者には、至極有益なる書也。されど、眞に獨逸の詩粹を譯したるものとは云ふべからず。譯詩家として大成するも、亦文壇の一大事業也。蘆風、請ふ、奮起せよ、柴舟も亦。

## 文藝の第一義

眞理を發揮するとか、人生の歸趣を説くとか、主義とか、理想とか、人生を描くとか、文學者、それ自身には、いろいろ

考があるべけれど、社會は、唯娛樂の爲めに、文學を要求する也。文學者が、自家のちのろけをうつし、不平をうつし、煩悶をうつして、それで、其人は氣がすむべけれど、世間が見て、面白くなければ、之をすつるまで也。即ち、その作者は、文藝の第一義を得ざるもの也。文學者の中には、進歩するらむ未來の社會の娛樂を標準として、筆をとるものもあるべし。これは、必ずしも文藝の第一義にそむけるものにあらねど、今の世の娛樂を代表せる識者が、氣に入らざるを以て、之をすつればとて、文學を解せざるものとは云ふべからず。術學、術識、術字、これ文學の本意に非ず。吾人は、時に進歩の犠牲として、新奇にして生硬なるものを取ることもあるも、眞にそれを喜ぶにはあらず、通がつたり、ちがつたり、氣取りたり、ひねくりすぎたりして、その作者は、いゝつむりなるかも知らねど、余輩にありては、娛樂よりも、むしろ苦痛也。理屈つぼくして、學をてらひて、本人は、得々たるもあるべけれど、理屈なら、吾人は、文學者よりも、哲學者に聞く方が、早手廻し也。具體の直觀、これ余が文學者に尙ぶ所也。技巧の點にては、文字と思想と調和して、斧痕なきを尙ぶ。文字の美以外、人を動かす節なきものは、詩人にあらずして、詩の細工人也。かくて、余が批判の標準も、主として直觀によらむことを期す。煩瑣なる規律を設けざる也。

## 圈 點

今日の是にして、昨日の非なるを知ると云ひけむ。余は、文章に圈點をうつことを喜びたるもの、一人也。十年以前の

頃は、最も盛に之を用ゐ、以後、漸々うち方を減じたれど、昨日までは、なほ全く之を廢せざりしが、今思ひたちて、之を廢しぬ。されど、全然之を廢するには非ず。余は、慣用の久しき、文章に圈點あるを見て、眼に一種の快感を覺えたりき、従つて、自作の文章に、よしと思ふ文句あれば、惜氣もなく、自から圈點をうちたりき。後、打ち方をへらして、眼目と思ふ處を主として、圈點をうちしが、それも、打ち方が多くては、さつぱり、人の注目をひかざることを覺りぬ。慣用十年、茲に一念發起して、西洋にて、イタリックを用ゐるやうの場合にのみ用ゐると思ひ定めぬ。

他人の作に向つて、圈點をうつは、わが眼識を示すたよりになる事なれど、自から自作の佳處に之をうつは、世の識者を馬鹿にしたる話也。多くの圈點は、術氣、慢氣、陋氣の代表也。圈點づきの文章の散見するは、單に眼より見たる上の文壇の醜態也。されど、世には、眼の習慣に制せられて、圈點を濫用する人多し。知らず、かゝる人達は、余の改悛を見て、如何にか感じ給ふ。

●二月の新小説にありては、嵯峨の屋の譯せる巨漢が、歴卷也。譯はまづけれど、物がよし。浮世に擯斥せられたる不具者の巨漢が、情婦に第二の情夫出來たるも忍んで、黙許して三人生活を爲し、去らむとするも、われ去れば、情婦餓死すべく、第二の情夫も餓死すべしと思ひて去りもせず、一種仁人の係をこの巨漢に見る。今の日本の作家には、これくらゐの事も思ひ付けざるべし